

ダイバーシティ推進トップセミナー「変容しつつあるジェンダー概念の理解に向けて」

深見, 真紀
国立成育医療研究センター : 分子内分泌研究部長

伊藤, 公雄
京都産業大学 : 客員教授

玉田, 薫
九州大学 : 副学長

<https://hdl.handle.net/2324/7344061>

出版情報 : ポリモルフィア. 7, pp.6-21, 2022-03-17. Office for the Promotion of Gender Equality,
Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



特集 令和3年度 ダイバーシティ推進トップセミナー 「変容しつつあるジェンダー概念の理解に向けて」

総合討論 「性スペクトラムと性別役割分担意識」

パネリスト：深見真紀（国立成育医療研究センター分子内分泌研究部長、研究所副所長）

伊藤公雄（京都産業大学客員教授、ダイバーシティ推進室長）

司会進行：玉田 薫（九州大学副学長、先導物質化学研究所主幹教授）

【玉田】この総合討論では、

- ① 男女は単純に分けられない。だが、分け
て考えないと社会的対応が遅れる。
- ② 多様性を受け入れる社会をどうしたら早
急に実現できるのか。
- ③ 次世代育成・教育の観点で注意すべきこ
とは。

について、本日で講演をいただいたお二方の御意
見を伺い、また参加者の質問を受け付けます。そ
れでは伊藤先生、深見先生、御意見を願います。

【伊藤】多様性に向かって社会が進んでいるのは
事実ですが、日本の社会は多様化に出遅れていま
す。マジョリティー側が自己認識を深めるととも
に、マイノリティーの声を受け入れる寛容さを持
つことが大切です。

社会は今、男性主導社会で、男性をルールの
基にしているわけですから、女性の声を社会に
広げるために、女性が声を出すと同時に、声が出
しやすい環境をつくり、その声を男性たちが聞

きながら改めるべきところは改めていく。これか
らSOGIの問題、LGBTの問題、障害がある人の問
題、色々な小さな声をうまくマジョリティー側が
受け止めて制度改革していくことが大切だと思い
ます。

【深見】なかなか難しい問題ですが、子どものこ
ろから多様な性、多様性に関する知識や家族の形
態にバリエーションがあることを伝え、多様性を
受け入れるように育むことが大切だと思います。

【玉田】有難うございました。また、後程この話
に戻ることにして、ここで質問に移ります。

まず深見先生への質問です。細胞レベルの性は、
心や体の性にどのように影響を及ぼすのでしょ
うか。

【深見】これはすごく重要な質問ですが、まだほ
とんど分かっていません。Y染色体の喪失やマイ
クロキメリズムの心と体に及ぼす影響、そういう
データはまだ十分にありません。

ただ、ホモセクシュアルの男性はお兄さんがい
ることが多いという統計学的データがあるそう



伊藤公雄氏



深見真紀氏



司会：玉田 薫

で、それはマイクロメリズムかもしれないという話を聞いたことがあります。真偽のほどは分かりません。

【玉田】 有難うございます。多様に研究を進めるべきと、エンカレッジいただいたということかなと思います。

では、次の質問です。性スペクトラムの連続性に対応した、あるいはこれを意識した社会システム変革の試みには現時点ではどのようなものがありますか。

【深見】 これも重要な質問です。例えばインドやオーストラリアで、男女以外の性をつくって、パスポートあるいは公的書類に選択肢を置いていると聞いています。それは一般人の中にある程度の割合で、男でもなく、女でもない人がいることを認めているということで、社会における重要な性スペクトラムの一つの捉え方だと思います。

【伊藤】 パスポートに関しては、第3の性を取り入れているところはかなり増えていると聞いています。その辺は、多様性に社会を開くときの一つの切り口だと思います。

今、日本でも、アンケートの性別欄に「男」「女」の2種類ではなくて、「その他」や「答えたくない」など、第3項目ないしは第4項目を入れる形で動

き始めています。これも多様化に向かっての一つの工夫だと思います。

【玉田】 有難うございます。続いて伊藤先生への質問です。ヨーロッパで（ジェンダー平等を）乗り越えたときの工夫はどのようなものでしたか。夫婦別姓を違憲とする最高裁を持つ日本に、受け継げる地盤はありますか。

【伊藤】 日本はもともと夫婦別姓の国です。韓国や中国では女性を家に入れないという意味での夫婦別姓のパターンです。日本はもともと別姓でしたが、明治民法がヨーロッパのまねをして、夫の姓に統一したのが日本の夫婦同姓の仕組みですが、むしろ日本はもともと別姓文化だったと思います。第2次世界大戦後、ヨーロッパの国で特に1960年代、1970年代に、名字の選択や連合など色々な動きが展開していきます。日本の場合はもともと伝統だった別姓を無理やり同姓にしたわけです。ただ、世論調査を見ると、現在では選択的夫婦別姓に賛成の方が多数派なので、世論と政治の間のずれがある状況です。

ヨーロッパではこのほかにもクォーター制など色々な工夫があります。

【玉田】 伊藤先生への関連した質問です。日本における男性主導社会の歴史についてよく理解しま

した。アカデミズム、大学における男女の問題・視点で間違った認識で進められているもの、早期に解決すべきと気になっているものはありますか。

【伊藤】 アメリカで1970年代、1980年ぐらいからジェンダー研究が広がり、特に人文社会系を中心に、大きな転換を生み出しました。つまり、ジェンダーという視点に立つことで学問的な読替えが始まるということが展開されました。しかし日本の場合、この転換への対応が物すごく遅かったという認識があります。日本のアカデミズム自体が男性主導で、新しいジェンダーの視点に対応してこなかった。

さらに、これは色々なデータがあるのですが、成績がよくても女の子は大学に行かないほうがいいという社会的な風潮が21世紀にも残っていた。色々な要素がアカデミズムにおける女性の参画を阻害してきたと考えられます。OECD加盟国の大学進学男女差のデータをみると、1990年代半ばに、平均して女性が男性より進学するという傾向が見られます。唯一、男性が女性よりも10%近く進学している国、それが日本です。

つまり、色々な要因で、女性が大学や高等教育に行く仕組みがどこかで抑制されてきたことも、日本のアカデミズムにおける女性の参画の遅れと関連していると思っています。

【玉田】 有難うございます。関連した質問が来ています。両先生にお答えをお願いします。深見先生は専門を離れて女性の目線でもお答えいただきたいのですが、日本の場合、長期の社会的不平等のために、心理的に女性の社会進出が抑制され、リーダーシップが発揮しにくい問題があるように思います。これの解決について、御意見を願います。

します。

【深見】 難しい問題だと思いますが、昭和の時代はやはり男の子が学級委員長だという流れがありました。今は、だいぶ状況が変わってきていると思いますが、リーダーシップを発揮する子は、男女に関係なくそれを伸ばしてあげる。男の子でもおとなしい子はいますので、性ではなくて、それぞれの長所を生かす教育はすごく大事です。

長期的には女性がずっと働きたいだけ働けるような環境を整えることも、すごく重要だと思います。

【玉田】 有難うございます。伊藤先生、お願いします。

【伊藤】 これは教育学の中で言われる成功不安という問題でもあります。社会はかなり変わり始めていますが、女性は子どものときから、リーダーシップは取るべきではない、陰で支えるべきだと刷り込まれ、リーダーシップを求められると引いてしまう女性たちがまだいるのは残念ながら事実です。

PTAで優秀な女性に会長をお願いしても「嫌です」「できません」と断る人がいます。それはいわゆる成功不安で、リーダーシップを取る準備ができてない。最初に断ってしまう、一歩引いてしまうというトレーニングを受けている。その辺を変えていくのがまさにエンパワーメントで、抑制しているところを解きほぐし、「頑張れ」と言うだけでなく環境整備をしないと、なかなか頑張れないこともあると思います。

あともう一つ、日本で女性のリーダーシップがなかなか広がらない、女性たちが管理職になりたくない理由の一つは、やはり男性の置かれた労働環境の悪さという問題もあるわけで、男女とも労

働環境を変えていく。これは大学だけでなく、あらゆるところで、日本の特に男性の働き方、男性の仕事の仕方、生きづらさも見直していかないといけません。

【玉田】 そろそろ時間になってきたので、今日の御講演、その後の討論を通じまして最後に一言ずつ、いただけたらと思います。深見先生、お願いします。

【深見】 本日は有難うございました。私も非常に勉強になりました。伊藤先生がおっしゃるように、男女共同参画は女性に頑張れ、頑張れと言うだけでなく、男性も含めてそれぞれがベストのスキルや能力を発揮していくことが必要です。今後、時間はかかると思いますが、進んでいけばという気がします。

【玉田】 有難うございました。伊藤先生、お願いいたします。

【伊藤】 今日の深見先生のお話のように、性の問題は、性は多様だということをきちんと認識いただくことは大事です。とはいえ、女性というくくりの中で様々な差別や排除がある。逆に男だからといって無理させられている問題もあるわけで、ジェンダーの問題というのは簡単には片づかないところがいっぱいあります。かなりきめの細かい視点を持ち込みながら、どうやってジェンダーにとらわれない、一人一人の能力が生かせる環境をつくれるか、はそんなに単純な問題ではない。でも逆に、これをやらないと日本の社会も日本の学術も未来はないと思っています。（参加の皆さんにも）ちょっと本気で考えていただければと思います。

【玉田】 本日は、生物学的視点と社会学的視点からの御講演、そしてそれに続く総合討論で、大変勉強になりました。どうも有難うございました。